コレットの『気ままな生娘』について

遊　佐　礼　子

要　旨

わが国では映画「青い麦」，『ジジ』を知っている人でも，その原作者がガブリエル・シドニー・コレットだということを知る人は少い。

ここでとりあげる『気ままな生娘』もクロディーヌものの蔭に埋もれて殆ど知られていないと思われる。

《官能の快楽》は文学の永遠のテーマであるが，殆ど常に男性の視点で追究されてきた。コレットが女性の視点から《官能の快楽》を臆することなく女主人公に追究させているこの作品は，前世紀末前後にあっては非常に新しかったと思われる。夫婦・恋人同志の真の幸福は，お互いの性愛の本質をわかりあうことにあり，人生の幸福はその上に成り立つ，と主張していることを作品を通して明らかにしたい。

はじめに，この稿はすべて二見書房から発行されたコレット全集の９巻に収録された，三輪秀彦訳『気ままな生娘』に依っていることをお断りしておきたい。

この『気ままな生娘』は，1904年に『ミンヌ』，1905年に『ミンヌの迷い』のタイトルで，コレットの夫ウィリーの著名で出版された。コレットは1906年に夫と離婚する。そのあとでこの二つの作品に手を入れて一冊にまとめ，1909年に『気ままな生娘』のタイトルで出版した。この時，別れた夫ウィリーは，「この作品はコレットが書いたものだ」と認めた念書を発表している。

『気ままな生娘』は女主人公ミンヌの娘時代と結婚後の二部構成になっている。この稿では作品の中で，思春期の男女が，結婚後若い夫婦として成長してゆく過程を，コレットがどのように描いているかを，作品の時間的経過に沿って進めてゆきたいので，作品を論ずるというよりは，コレットの引用を含めて作品を紹介するという形になると思われる。

第一部　娘時代

主人公のミンヌが，３才年上の従兄のアンワーヌと15才の夏休みを，彼の父でミンヌの伯父でもある，医師のポールの別荘で過している時のエピソードが描かれている。

アントワーヌは思春期の少年の眼でいつもミンヌを見ており，ミンヌの美しさを誇らしく思い，愛しているミンヌに自分が愛されているかを確かめたがっている。ミンヌの方は，母親には勉強をしているふりをして，こっそり読んでいる新聞の「夜のパリ欄」にでてくる無頼漢や売春婦の世界に興味をもち，いつかその仲間の女王になると夢想している。ミンヌとアントワーヌの感情のすれちがいを，コレットがどのように描いているかを作品の中から追ってみよう。

*

大雨のあとの暑さのぶりかえしに鎧戸のおろされた「反響ときしみ音でいっぱいの薄暗い食堂は，ふたたびものういミンヌと幸福なアントワーヌを包みかくす……アントワーヌはトランプ占いの13枚のカードをゆっくりと動かしている。自分の目の前に変身したミンヌがいるので大喜びなのだ。彼女は〈涼しくするために〉髪を大胆に巻髪にしていた。だから頭をまわすと，日影の百合のように青味がかった白い首筋がのぞき，巻髪から逃れた細い毛がそこに植物のごとき優雅さでそりかえっていた。……彼女を〈貴婦人〉に変装させるその髪型の下で，ミンヌはテキパキと動きまわり，アントワーヌや彼のおしゃれの試みを遠くはねのけてしまう」[1]

雨のあとの夏の暑さのなかで，息詰そうなミンヌと，好きなミンヌが暑さをしのぐために巻き上げた髪の大人っぽい雰囲気に幸福感を味っているアントワーヌの対照的な様子，髪型がミンヌの首すじの白さと数本の毛筋が女性的魅力をましている優雅な彼女。それにくらべると黒い髪で陽焼けしたアントワーヌは自分の服装と赤いスカーフから〈新サーカス〉のカウボーイにみえて，愛されていない恋人は美しくなれないと悟る。

ミンヌの服装では暑くはないかのやりとりのあと，ミンヌの無邪気な動作と言葉に挑発されたアントワーヌは，ミンヌの手首をつかみ自分の胸をミンヌにすり寄せようとする。寝る前にこの時のアントワーヌの力を思い出した

ミンヌはアントワーヌのことを，突然彼をあれほど乱暴でぶるぶる体をふるわせるほどにした熱狂のことを考える。どこまで争ったか，よく覚えていないが，あの瞬間の高校生，ほかの男ではなくアントワーヌに対して深い恨みの気持ちを味わったのだ[2]。

この「深い恨みの気持」というのは，結婚後もミンヌが男に対してひきずってゆくライト・モチーフとなる。アントワーヌは新学期がはじまるとミンヌと別れて暮らさねばならないことから，ミンヌの気持を確かめる決心をして，

「よくきいてくれよ，ミンヌ。とても重要なことをきみに話しているんだ。きみの返事もとても重要なんだよ……ミンヌ，きみは将来ぼくと結婚してもいいと思うほどぼくを愛しているかい？」

「いいえ」「あたし婚約しているんだもの」彼女は嘘をついた。それとも嘘をつかなかった。その二つのうちどちらが悪いのか彼にはわからない。〈女の子たちって，こわいものだな！〉と彼は無邪気に考える[3]。

その後ミンヌはアントワーヌに，自分の婚約者あての代筆をたのむことで自分の夢想の出来事に捲きこもうとする。代筆をことわるアントワーヌを彼女は異常と思って眺た彼に，ふと5年先，6年先のアントワーヌ，長身でがっしりとして，ぴったりと身についた衣服のような肌で，黒いならず者のやさしい目しか残していないアントワーヌをみた。

彼女は「街角で毎日見かける浮浪者が自分を愛していると勝手にきめこみ，この男が自分を誘拐して，無頼漢の世界に連れて行ってくれるものと思いこんだりする。こうした少女の妄想は，病的なまでに昂じ，ある夜窓の下を歩いている男をてっきりその男と思いこんで，夢遊病者のように男のあとを追いかけ，むなしい追跡を翌朝までつゞけて死んだようになって家にかえってくる[4]。

帰る途中，彼女は顔みしりのコルヌじいさんをみたような気がして，今までのことは夢だったと思い，じいさんにつかまらないように去ったとき，ころんで顔じゅう泥だらけになる。

身体中泥だらけで戸口に倒れていたミンヌは暴行を心配するポール伯父に診察されて，無事だったことが判明するが，母親は半信半疑である。ミンヌの様子に神経症のように不安なアントワーヌは，ミンヌが普段話していたことが本当のことだったと思い込む。落ちついたミンヌの痛々しい様子に死ぬほどの苦しみに襲われたアントワーヌはすすり泣く。ミンヌが「あの話は嘘だった」といっても，「悲しみにうちのめされた彼が信じているのは，その魅力的な少女が自らすすんで玩具に，ひどい人形役になり，それから１人，もしかしたら何人かにさんざんいためつけられたことだった」。

*

一部でのミンヌは，思春期の少女が想像の中で思い描く，実態のつかめない恋の姿と未知の情熱をあれこれ追い求め，現実と区別がつかなくなり，ある意味では起るべくして起った行動をしたといえる。

第二部　結婚のあと

第二部の時間の設定は，ミンヌがアントワーヌと結婚した二年後である。ミンヌは結婚によって，性による官能的な喜びを得られず孤独である。彼女はこの未知の官能的なよろこびとはどんなものかを求める新しい冒険をはじめる。夫につれてゆかれた，彼のパトロンのショーリュ氏の家のサロンは，控え目なショーリュ氏と悪意で身をかざり「パリでいちばん意地悪な女のショーリュ夫人」という評判をとっている。こゝでお喋りしあう女たちの性的快楽の瞬間の話とか，小説に書かれたクライマックスの場面から，ミンヌにとっては未知のよろこびの知識を手に入れることはできるが，男性から手に入れることが全くないことに彼女は絶望している。

性的場面に登場する人物はつぎの５人である。１）夫のアントワーヌ，２）ジャック・クデルク男爵：22才の若僧でいっぱしの女たらしを自認している。３）ディジェンティ：イタリヤ人の作曲家，４）最初の恋人：病院のインターン生，固有名詞なし，５）ヘンリー・エージ：ショウリュ夫人のサロンに出入するアカデミシャン。40男。彼の著作からのミンヌの評価は（肉欲についてくわしい男）。ミンヌの幸せについて心づかいをみせた最初の男で，性的結びつきはない。

*

第一行目は，〈おれはミンヌと寝るんだ〉というクデルク男爵の言葉から始まる。さらに続く〈おれはミンヌと寝るんだ！……奇妙だな，ピカ…の弟の英国女を除けば，こんなに気に入った女はいない……ミンヌは並の女とはちがうんだ……〉という彼の内的独白は，当時の男性たちの女性観を代表

するものかもしれない。ミンヌの「官能的なよろこび」への冒険といい，女性は「寝ることに価値」があるという男性の本心といい，一歩間違えばポルノまがいの筋立てになりかねないテーマということができる。

逢い引きの帰りのミンヌの考えは

〈また一人か！〉〈というわけさ……また一人！　三人目，しかも失敗。そろそろあきらめるべきなのに。病院のインターン生だった最初の恋人が，あたしは《完全に愛にぴったりの体》をしていると断言しなかったら，えらい専門家に相談に行ってたのに……〉（……）

〈……二人目のときと同じね，アントワーヌがブレイルの店で知りあったあのイタリヤ人，そう……がつがつした男だったわ……〉（……）彼女がこの瞬間にアントワーヌのことを考えたのは，彼に漠とした無益な責任をかぶせるためだけだった。（……）

二年の結婚生活，そして三人の恋人……恋人？　彼女の追憶のなかで彼らを恋人と名づけていいのか？　彼女は彼らに対して，かすかにうらみをこめた無関心しか抱いていない，彼女がすでに気落ちした執拗さで求める短くひきつるような幸福を彼の傍で味ったあの男たちに対して。容貌も名前さえも薄れる記憶の灰色の片隅に追いやってしまう……唯一の明確で，新しい傷口の色彩をもった追憶は新婚の夜のことだ。（……）

傷けられたミンヌの鋭い悲鳴に，アントワーヌは楽しげな感謝と，感動的な配慮と，兄弟みたいないたわりといった愚かしい意志表示で答えた……[51]

このアントワーヌの態度は，昔ミンヌが夜の外出から泥だらけで帰宅したとき，ミンヌは暴行されたのではという，彼の抱いていた一沫の不安が，ミンヌの痛みのための悲鳴に消え去ったからであろう。同じ不安をかゝえていた母親が死ぬ前に，「アントワーヌ以外の人とお前は結婚できないよ」と言った言葉に縛られて，兄弟みたいなアントワーヌと結婚したことの失敗をミンヌの方は思い知らされたのだった。だからアントワーヌの感動とは反対に，彼女を酔わせるものは何もなかったのだ，自分の苦痛でさえも約に立たない。アントワーヌはミンヌの求めているものには気づかず不器用に眠りこんでしまう。結婚生活の第一段階で失望と孤独にしっかり捕えられてしまうのは新妻にとっては不幸なことである。

子供時代にみていた自分の未来への冒険の夢からは目をさましていたミンヌだが，冒険にむかって長い間夢みるという習慣は失っていない。失望したり辱しめられたり，教えられた彼女は，冒険とは愛そのものであることに気づきはじめる。だがミンヌにはまだその正体はわからない。

ミンヌを熱愛しているアントワーヌの愛には，節度も欺瞞もない。彼は絶えず「きみを愛しているよ」とミンヌに叫ぶ。アントワーヌの言葉は絶対的に真実なのは確かだが，ミンヌはもし自分が同じように断定法で《あなたを愛していない！》と確信をこめて叫んでいたらどうなっただろうと考えこむ。ミンヌの眼にはアントワーヌが自分の立場からの愛だけしか伝えていないとうつるのであろうか。筆者は，アントワーヌがミンヌの求めているものは何かに，夫として気づいてゆく過程を作者のコ

レットはとても丁寧に描いていること，子供時代のミンヌについての彼のもつ様ざまな記憶が大きな役割を果してゆくことに気づかされたことを指摘しておこうと思う。

ショーリュ家のサロンに出かけるとき，帰宅がおくれて10分で外出の身じたくをしたミンヌの，不可思議な魅力に思わず「早くおいで，ぼくの人形……」と叫んでしまうアントワーヌ。この「ぼくの人形」からはアントワーヌも他の男性同様，妻は一種の愛玩物と見なしていることが伺われる。

サロンでの会話中の中傷話に登場したバルネリ夫人を弁護してショーリュ夫人はいった。「もちろん彼女には何人も恋人がいますわ！　それは彼女の権利です，恋人を持つことは！　それは人生に欺されたすべての女性の権利なのです。」彼女の話しぶりにアントワーヌは〈ミンヌがこの女傑に嫌われでもしたら，ぼくたちは困るだろうなあ！　あんなに純粋なミンヌ〉と思う。

ショーリュ夫人はモージをたきつけてミンヌを誘惑するように仕むける。ミンヌは夫人のたのみで，客にコーヒーをすゝめる役をひきうけ，逢い引きのあと別れたクデルクと鉢合わせをする。びっくりした彼の様子をみたモージにショーリュ夫人は，クデルクがミンヌに首ったけなのに彼女は知らん顔，という情報を伝える。クデルクを眺めたミンヌは，一人前の女にしてもらうのにあんな若い男をあてにするんじゃなかった，と苦い思いを抱く。何とかミンヌをつかまえたクデルクは，彼女を愛している，と告げるがミンヌは，体を自分のものにしたから愛が生れるのか説明してくれといい，「そんなことは考えられないわ！」と失望の叫びをあげる。

翌日の朝，主婦であることの理性をとりもどしたミンヌは，前日の失望，四度の失望を反省する。〈あたしはだれそれ氏を喜ばせるために，そこらじゅうで不都合をしたり，巻髪を結い直したりするために，ベッドからベッドへと渡り歩くわけにはゆかないわ〉という苦い思いを味う。クデルクから届いた二度目の逢い引きの速達をばらばらにちぎってすててしまうが，逢い引きには出かける。クデルクの若い肉体からの奇蹟に対する希望の灯をもう一度ともすが，今度も彼はひとりで倒れる。この時のミンヌの心の動き，ミンヌの肉体の快楽，官能のよろこびに対する感じ方をコレットはつぎのように描写する。

> 彼女はこの激昂した子供の陶酔，彼が与えるすべを知らない失神などをはげしく羨やむ。〈この快楽を彼はあたしから盗んだのだわ！　彼をあたしの上で打ちひしぐこの聖なる雷の一撃は，あたしの，あたしのものよ！　あたしはそれが欲しい。さもなければ，彼はあたしを通してそれを味うのをやめさせて……〉[6]

ここには，ジョルジュ・サンドの《レリヤ》[7]が求めて手に入れられなかったものへの要求がある。女性の要求に気づいてもらえないために苦しむ多くの女性たちの叫びでもあろう。極端ないい方をすれば古代から女性たちがかかえてきた問題であったのではあるまいか。

再び失望を味ったミンヌは，クデルクに二度とあうことはないであろう。クデルクと別れるとき「あたしは二度ともどってくるほど，あなたを愛していないわ」という決然とした言葉を投げつけている。クデルクがミンヌを「愛している」といっているものはクデルクだけのもので，ミンヌの求め

ている愛を与えるものではなかった。その後クデルクはミンヌの立ちまわりそうなところへ姿をあらわし続ける。今の言葉でいえばストーカー行為を止められないのである。

夕方帰宅したアントワーヌは，居間で居眠りをしているミンヌをみておどろく。彼は自分が熱愛するこの子供が何と悲しげに眠っていることか，と胸をつかれる。その疲れきった居眠りは，アントワーヌには一度も見せたことがない別の顔で，アントワーヌにはそれだけでひとつの嘘のように思われた。

ミンヌを連れて出かけたコンサートで，イレーヌ・ショーリュ夫妻とモージを見かける。モージを話題にしたとき，自分も口説かれたというミンヌを，アントワーヌは問いつめようとするが黙ってしまう。彼にとってモージのことはどうでもよいことだ。彼が恐れたのは，ミンヌが，また嘘をつく楽しみのために嘘をつきはじめること，彼女が神秘的な少女時代にさまよっていた，あの背徳的で妖精じみた，ほの暗い庭へまた足を踏み入れることだった。

年末年始の時期になり，季節の日常の仕事をこなしおえた彼女が寝ようとすると，「ぼくも行くよ」とアントワーヌがいう。それを聞いてミンヌは

〈これがあたしの夫なのね，他の男より悪いわけじゃないけど…とにかく夫なのよ。要するに今晩のところ，あたしが同意すれば，早く落ちつけるわ。〉奴隷の哲学じみたこの結論に達すると，彼女はゆっくりと寝室に向い，歩きながら髪のピンをはずした[8]。

夫の，自分と寝たいという意志表示をうけとめたミンヌの反応は，喜びというよりはしかたない義務として手ばやく済ましたいという様子をみせている。夫からも官能的よろこびを与えられていないことが仄みえているように思える。

*

パレ・ド・グラース・スケート場に通いつめるミンヌは，ある日一緒になったモージに自宅に招かれる。家には日本の画家のカケモノがたくさんあり，一見の価値があるというのが口実であった。こゝには当時のジャポニズの匂がある。

帰宅後，先に帰宅していたアントワーヌと，初めての〈夫婦喧嘩〉をする。アントワーヌはミンヌを監視していることを思わず白状する。〈そう，彼はあたしを監視しているのだ〉。ミンヌは心ここにあらずといった状態で，しばらく前からあまりアントワーヌに注意を払わなかった。彼は変っていた，以前よりお喋りも食事も少なくなっている。彼は三つの顔をもつミンヌへの心配に侵蝕されて殆ど眠れなくなっていた。

ミンヌの微笑，次に苦しげな眠り，それから馬鹿笑いがアントワーヌの心で重く重りあい，そこに一人の未知の女，異邦の女の神秘的な顔を刻みつけている。

彼はミンヌの子供の時の写真をオフィスに運んでくらべてみた。ミンヌの三つの顔はもうこの頃すでにあったことに気づいて，

〈そうだ，そうだ，ぼくは馬鹿だった，そしていまそうなのだ。しかしいいか！　彼女はぼくのものだ，ぼくのものだ，だからいざとなったら……〉（……）いま彼の目の前には，荒々しく深刻な苦しみがあった。怒りで血の気を失った，このぴんとまくれた唇は何を意味するのか？　まぶたの薄紫色の真珠層まで，血管の細い枝まで，彼がすべて知りつくしていると信じているこの顔に，まだ未知の部分があったのか？　彼女は毎日不安で彼を圧倒するために，変った美しさを見せるつもりなのか？[29]

何げなくみせるミンヌのそれぞれの表情のもつ意味をすっかり知ることのできない不安に苦しむアントワーヌは，今までミンヌに対して，自分の側の情念だけで対応してきたことを発見したのである。ここまできて，ミンヌの求めているものは何か，を考えるまでに夫としては成長したといえる。それでもまだミンヌの行動が把握できない不安に，探偵をやとってあとをつけさせる。それに気づいたミンヌは探偵をまいて家にかえり，もう帰宅していたアントワーヌに向って，腹を立てて自分の行動を洗いざらい喋り続ける。聞いているうちに，心の中にあった痛いほどの嫉妬が消えはじめ，ミンヌの怒った声も耳に入らなくなり，心の中で考える。

彼はその弱々しく腹を立てやすい子供に対して，彼女を敵のごとく扱うという犯罪的な誤ちを犯そうとしていたことをゆっくりと発見した。彼女はこの世でひとりぼっちで，しかも彼女は彼のものだ。たとえ彼女に嫌われていようと，彼のものだ。彼女には彼以外の助けもなければ，避難所もないのだ！　彼女は彼の妻になる前は妹だった。そしてその頃から，彼女のために熱烈なる兄として愛情を注いでいた。いまや彼には愛情以上のものが必要なのだ，彼女を幸福にすると約束したのだから。困難なつとめだ！　なぜならミンヌはファンタスチックで，時には残酷だから……しかし苦しむのを恥ずかしがる必要がない，それが幸福を与える唯一の方法の場合は……[30]

アントワーヌは以前にも自覚した「ミンヌはぼくのものだ」という確信から，ミンヌにとって一番必要な存在として何をなすべきかということ，子供の頃兄として注いだ愛，現在夫として注ぐ愛だけでは不十分で，ミンヌが幸福になるための自由を束縛しないこと，傷ついた時の避難所たるべきことだという発見をすることになる。彼女の幸福を第一に考える夫でありながら，夫以上の役割をひきうけることが，最も必要なアントワーヌの態度だということに気づいたのである。

パトロンのショーリュはアントワーヌにモンテカルロに交渉に行ってほしいと提案する。アントワーヌはミンヌに「君がそうしたいのなら一緒に行って欲しい」という。ミンヌは「モンテカルロへ，あたしが？　なぜ」と聞く。「ぼくがとても楽しいからさ」と応えるアントワーヌにミンヌは「いつ出発するの？」と応える。〈彼女は誰も愛していない，彼と出かける〉とわかったアントワーヌは，夕方の暗闇のなかでミンヌを抱きしめていた。

そしてミンヌのかよわい肩に腕をかけ，あまり強く締めず，自由を奪わないで，彼は彼女に幸福

を与える。彼女が望むときにそれをつかませる，彼女のためにそれを盗んでやる，といった無言の誓をあらたにするのだった……(11)

*

モンテカルロにはイレーヌ・ショーリュ夫人の姿があった。パリで，モージと寝ることで自分の求めている官能のよろこびを手にいれたいと自分の裸身を差しだしたミンヌに，モージは「あなたはあまりぼくを愛していないんでしょう」といってミンヌに手を出さない。自分の悩みをすっかり打ちあけて「一人として，あたしの目のなかの失望を，あたしが堪能させてやったものへの飢えや乾きを読みとるほど愛してくれなかったもの！」と訴えるミンヌの心を落ちつかせてから，アントワーヌのところへお帰りとはげましたのだった。この時ミンヌはモージから，色恋抜きの人生の最初の喜び，可愛がられ，保護され尊敬されるのを感じるという喜びを味った。ミンヌがモージから学んだ安らぎは，アントワーヌがミンヌの幸福を一番大切にしようと決めたことを，ミンヌが感じ取れる下地をあたえたことになるかもしれない。

カジノからホテルに帰る馬車の中で，二人が海をみたときアントワーヌは「この国が好きかい」とミンヌに聞くと「好きじゃない」という。わけをたずねるアントワーヌに「わかんないわ。一度もみたことがなかった海があるのにね，あの果しない水のせいで，ぼんやりしてしまって，よそよりもひとりぼっちに感じるのね」という。そういうミンヌ見たアントワーヌは，自分がミンヌの夫であること，信頼されたトルコ高官のように彼女を扱っていたこと，「ぼくが欲しいかい？」とたずねないでミンヌを抱いていことを考えていた。自分の情熱だけでミンヌを抱いていことに気づいて驚いたのである。

ホテルの窓から外をみていたミンヌはすっかり冷えて，冷たくなったベッドに入ってからもアントワーヌにお話をせがむ。アントワーヌがパリがなつかしいなら早くかえっても良いというと，パリには友人もいないし，誰も愛していないと答える。アントワーヌはその中には自分もふくまれているのだと，喜びと苦しみの混りあった気持になった。ミンヌを愛しているから，途中で投げだしたくなったこともあるというアントワーヌに「あたしもあなたを愛しているのよ」ミンヌは答えた。
アントワーヌは続けて，

「そうかい？」「じゃきみが自分をよろこばせるすべてを要求するほど，ぼくのことを愛してもらいたいね。しかしすべてなんだ。いいかい，たとえふつうは夫に要求しないようなことまでもね，その後できみはぼくに泣きつけばいいのさ，ほら小いさい頃にしたみたいにね。〈誰かさんがあたしをこんなにしたの，アントワーヌ。彼を叱って，または殺して〉とかなんとかね。

今度こそ，彼女は理解した。きらきら光る捕われの蛇のように自分をアントワーヌに投げ出そうとする突然の愛情をどう告白したらいいかわからないままに，彼女はベッドの上に坐りこんだ……彼女は真青で，目が大きく開かれていた……この男はいったいどういう人間だろう，この従兄のアントワーヌは？

何人のも男たちが彼女を欲しがった……でも一人としてこうは言ってくれなかった，〈幸福にな

りなさい，ぼくは自分には何も求めない，きみには毛皮や，ボンボンや恋人をあげよう……）

いまそこでパジャマ姿で待っているこの殉教者に，どんな報酬を与えたらいいのか。せめて彼がミンヌの与え得るものを受け取ってくれればいい，彼女の従順な肉体，無感動な甘い口，奴隷の柔らかい髪を……

「あたしのベッドへいらっしゃい，アントワーヌ……」[13]

長い引用だが，ここには以前「ベッドへ行くのかい，ぼくも行くよ」というアントワーヌを，奴隷的哲学でうけ入れたミンヌはいない。コレットはこの時のミンヌの気持を「男たちの愛に報いるのに自分の体しかもたない娼婦の自信をこめた公平によって」と補足もしている。この娼婦という言葉は誤解をまねきそうだが，ミンヌが恋人が彼女から官能のよろこびを盗むと考えていたことから相手にそのよろこびを与えることも必要だと無意識に悟ったことの暗示ととることはうがちすぎであろうか。

さてアントワーヌは，ミンヌをこわれ物でもあるかのように優しく扱い，彼女の望む通りに動いた。いつも「彼女をやさしくいたわり，やさしく，ゆるく，深いリズムでわずかに彼女をゆり動かして」いるアントワーヌは自分の情熱のままには決して進んでゆかない。ミンヌの高まりが激しくなって「あなたのミンヌ……あなたのミンヌ……あなたのもの」と歌うようにいうと，アントワーヌはミンヌの幸福な肉体の大波が自分に伝わるのを感ずる。

アントワーヌはミンヌの幸福をまずねがい，その成就を待つ間にアントワーヌ自身も真の肉体の幸福感を共有したのである。この時，ミンヌにとってもアントワーヌにっとっても，肉体の幸福を共に手に入れるという奇蹟がおきたのであった。とりわけミンヌにとっては「人生はいま彼女の前に，美しい娘のように容易に官能的で，平凡な姿で訪れた」のであり，アントワーヌは妻の求めていた幸福を実現してあげられる夫に成長したのである。

*

この物語の終り方には，コレットの女性としての願い，もしくは要求がこめられていると筆者には思えてならない。恐らく多くのコレット研究家は女主人公ミンヌに重きをおいて考察されるのではないかと推測するが，筆者の関心は，当時のブルジョワ的価値観の環境の中では珍しかったろうと思われる，女性の幸せを肉体においても実現させたいというアントワーヌの存在であった。

作者コレットは，アントワーヌを，女性をを性的快楽においても尊重する男性のあり方のモデルとして示したかったのではあるまいかというのが筆者のこの作品を読んで得た独断的結論である。

G.S.コレット（1873～1954）は14才年上のH.G.ヴィラールと20才で結婚。夫はウィリーのペンネームをもち，コレットにも学校時代の思い出をかくすことをすゝめ，一連のクロディーヌものをウィリーの名で出版した。

わが国では映画『青い麦』，『ジジ』の原作者がコレットだということを知る人は少ない。

注

(1) コレット全集９巻『気ままな生娘』三輪秀彦訳　二見書房　昭和52年，p.40.
(2) 仝上　p.43
(3) 〃　p.45
(4) 〃　p.359「気ままな生娘」新庄嘉章による作品解説
(5) 『気ままな生娘』p.71～p.72
(6) 仝上　p.92
(7) レリヤ Lelia（1883）ジョルジュ・サンドのいわゆる情熱小説に属する作品：フランス文学辞典　p.863
(8) 『気ままな生娘』p.101
(9) 仝上　p.115
(10) 〃　p.139
(11) 〃　p.141
(12) 〃　p.148